

第2章 戦争のつめ跡

悲惨な戦争の真実と記憶を人々に伝えるため
杉並区内には戦後から永きにわたり生きながらえてきた
戦争の痕跡と物語がある

現存する防空壕 (杉並区内)

その防空壕は、コンクリートと鉄を主材料に、しっかりと構造設計されたもので、建具に経年劣化があるものの、今でも人の出入りがきちんとできるよう手入れをされた都内でも貴重なものだ。杉並区内のSさん宅にうかがって、現存する防空壕(ぼうくうごう) (参照▶P20)を取材した。

かつて区内にあった多くの防空壕は、物資が不足し地面に穴を掘り、その周囲に土を盛ったり、廃材を利用したりしたものであった。

しかし、この家の防空壕は別格なほど頑丈な設計がされている。まず地下へ延びる幅70センチメートルほどの階段は金庫の扉を流用したと思われる鉄製の扉で内部に通じる。壕の壁面と天井には、厚さ18センチメートル(6寸)ほどのコンクリートに漆喰(しっくい)が塗装され、天井は強度をとるためにアーチ構造になっている。階段は2か所あり、一方から火が入ってももう片方から脱出できるよう工夫がみられる。広さ4畳半程度の居住スペースに、空気穴が床に2か所と天井に1か所。また、地上の水くみポンプからパイプが引かれていた。壁の下に溝が切られており、排水する仕組みになっている。一時的に避難するというより、ここで生活できるような地下室であった。

家族を守るために必要だった

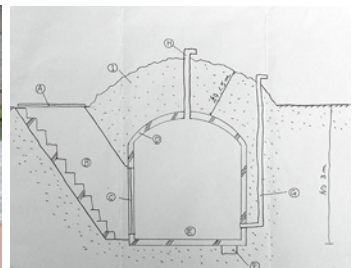
この防空壕は、昭和18(1943)年にSさんの祖父が家族のために造った。実際に大空襲(参照▶P18)を受けて一帯が焼け野原になったとき、この防空壕へ逃げ込んで助かっている。鉄製の扉やコンクリート等の資材の入手、建設作業には知人の協力もあった。お礼は日当のほか、食事の提供も喜ばれたという。「そんな大変な思いをしてでも、造らなければ家族を守れない。祖父は家族を守りたい一心で造ったのです。この防空壕を見るたびに、こんなものが必要だった時代は二度と来てはいけないと思います。今の私たちの暮らしには防空壕は必要ありません。現在の平和な暮らしの対極な存在として、防空壕を残していこうと思っています」とSさんは語った。

※この防空壕は個人宅内にあるため公開していません。

(取材:野見山肇)



敷地内に設けられた防空壕入口



防空壕の立面図(西)

高射砲陣地の跡地 (杉並区内)

戦争が激化すると、中島飛行機武蔵製作所および首都を防衛する必要性などから、昭和18(1943)年に陸軍高射砲第112連隊の管轄する久我山、下井草、松ノ木、西荻北に高射砲陣地が造られ、高射砲(参照▶P20)が配備された。その中でも中島飛行機の両工場の空襲経路にあたる久我山には、当時最新鋭の高性能高射砲が2基配備され、昭和20(1945)年8月1日に関東地方を空襲したB29(参照▶P20)爆撃機の編隊が上空に差し掛かった時、2機を撃墜したと言われる。

現在、高射砲陣地があった面影は、どこにも残っていないが、久我山運動場野球グラウンドのライト付近に陣地が設置されていたと言われている。

(取材:TFF)

出典・参考文献:

杉並区郷土博物館資料館『杉並史跡散歩 史跡散歩地図Nコース』

写真:国土地理院撮影の航空写真(1944年撮影)

昭和19(1944)年当時の松ノ木周辺。
写真中央付近の円形の固まりが
高射砲陣地と思われる



特種情報部として接收された福祉施設・浴風園 (杉並区高井戸西1-12-1)

浴風会は、老人保健・福祉・医療の3つの面で高齢者をサポートする社会福祉法人である。

大正14(1925)年1月15日に、関東大震災の被災老人の援護を目的として、約27,500坪の敷地に病院や礼拝堂など54棟の建物が建設された。戦時下において米軍の攻撃目標対象外といわれていた。そこに目を付けた陸軍は、昭和17(1942)年9月から昭和20(1945)年7月にかけて施設のほぼ半数を接收した。

原爆投下のための出撃は解読されていた

施設は陸軍参謀本部に貸与され、看板は「陸軍中央通信調査部」となっていた。だが、実際に使用していたのは特種情報部という部隊だった。なぜ、部隊名を隠していたのか？ それは特種情報部の任務が暗号解読や通信傍受など極秘事項だったからである。昭和20(1945)年8月6日午前3時に原爆投下のためにB29がテニアン島を発進したことも、ここで傍受された。広島に原爆を投下される5時間前のことである。

また、この部隊は暗号解読のほか、ワシントン(アメリカ)、メルボルンとシドニー(オーストラリア)から放送されるニュースを傍受していた。同年8月11日には、シドニーからのニュースでポツダム宣言が受諾されたことも知っていた。特種情報部の持つ資料は最高機密に相当する。ポツダム宣言受諾を知るや、陸軍はそれまで管理していた全機密文書の焼却を決め、現存する本館の3階の部屋で焼いた。『社会福祉法人浴風会

(総合老人福祉施設)第317号』によると、8月の室内でのことであり、処分に当たった軍人が「とても熱かった」と当時を語っている。

迅速に処理された不発弾

攻撃目標からは除外されていた浴風園だが、戦後に敷地内から不発弾が発見されたことがある。

『浴風会80周年史編纂委員会ニュース(第11号)』によると、昭和61(1986)年11月6日午後5時過ぎ、現在ケアハウスのある北側の土手で、高圧ケーブルの埋設工事を行っている最中に不発弾3発が見つかった。翌朝、陸上自衛隊第一師団不発弾処理班が派遣された。

発見されたのは全長1メートルの焼夷弾(参照▶P20)だ。7日11時15分にはそれらを自衛隊が小型トラックで持ち帰り、騒動は解決。危険性が少なかったため、職員及び近隣住民の避難措置はとられなかった。

出典・参考文献:

『浴風会創立四十周年記念誌』 浴風会

『浴風会八十年の歩み』 浴風会

『浴風会80周年史編纂委員会ニュース(第11号)』 浴風会

『社会福祉法人浴風会(総合老人福祉施設)第317号』

『軍機の内側で』 京都新聞平成26年8月5日

杉並区公式情報サイトすぎなみ学倶楽部

(再編集:野見山肇)



昭和20(1945)年5月に接收された本館。3階の室内で機密資料が焼却された

コンクリートの釣鐘が今も残る中道寺 (杉並区荻窪2-25-1)

除夜の鐘をつける寺として、区民に親しまれている中道寺。天正10(1582)年にこの地に日道上人という方が草庵を建てたのが開創と言われている。

安永2(1773)年に建てられた山門は、上層に鐘が吊るされていて、門と鐘楼を兼ねた楼門形式は珍しく、杉並区の有形文化財に指定されている。

現在は、住宅に囲まれる静寂の中に佇む寺だが、戦時中に鐘にまつわる出来事があった。重さ120貫(約450キログラム)の梵鐘(ぼんしょう)は、金属回収令のため国に献納された。ところが梵鐘がなくなったことで屋根が軽くなり、強風で飛んでしまう恐れがあったため、梵鐘と同じ重量のコンクリート製の

鳴らない鐘を作り、鐘楼に吊るして山門のバランスをとっていた。

戦後、他の寺より梵鐘を譲り受け、コンクリートの鐘は不要となったが、現在も境内に残されていて、当時の出来事をひっそりと物語っている。

出典・参考文献:

杉並区教育委員会

杉並区公式情報サイトすぎなみ学倶楽部

(再編集:TFF)



静かな寺の中に今も残るコンクリート製の鐘

花立に使われている焼夷弾 (杉並区清水2-15-7)

清水二丁目の閑静な住宅街に石塔(庚申塔と供養塔)が建立されている。

この辺りは、昭和19(1944)年から翌年の終戦までの間に、何度か空襲(参照▶P18)に見舞われた。その名残りであろうか、この石塔の花立には焼夷弾(参照▶P20)の残骸が2本使

用されている。いつ、誰によって設置されたか定かではないが、戦争の犠牲となった人々を供養し、平和を願うてのことであろう。(再編集:TFF)

正六角形で高さ約5センチメートル
賽銭箱の両脇に設置されている



日本で唯一の気象神社は軍事施設にあった (杉並区高円寺南4-44-19)



高円寺氷川神社内に祀られた気象神社



戦前の陸軍通信学校

気象神社は戦前、旧陸軍の施設である陸軍気象部(かつての馬橋四丁目、現在の高円寺北四丁目)の構内にあった。現在は、高円寺駅からほど近い高円寺氷川神社内に末社として祀(まつ)られている。禰宜(註1)の松井美加子さんから借用した『陸軍気象史』によると、最初の社殿は昭和19(1944)年に、陸軍気象部の正門を入った右手に竣工(しゅんこう)とある。その翌年、4月13日の空襲で焼失するが、終戦直前に再建。現在の社殿は平成15(2003)年に立て直されたもので3代目にあたる。

気象神社という名は、陸軍気象部にあった時代からの名称である。そもそもなぜ軍事施設に神社が建立されたのだろうか?『陸軍気象史』によると、当時の陸軍気象部の研究は、さまざまな局面を想定した高層気象観測や気象判断等に及び、科

学的でかなり高度な内容だった。一方、前線での気象予報は、情報不足もあり不完全であった。気象学の理論と現実との間に大きなギャップがある状況下で、「精神的な拠り所となることを目的に建てられたのではないか」と書かれている。

同社は、戦後昭和23(1948)年9月23日に連合軍より払い下げとなった。馬橋にあったのに馬橋稲荷神社ではなく高円寺氷川神社に遷座(註2)された理由について、山本雅道宮司は「当初、馬橋稲荷神社に引き取られたが、当時の故山本実宮司と馬橋稲荷神社の宮司が話し合った結果、高円寺氷川神社に移設し、当局に申請して正式に払い受けたと聞いている」と語る。何とも数奇な運命である。

気象神社の例大祭は、気象記念日である6月1日だ。例大祭には、今では少なくなったが旧陸軍気象部に勤務されていた方も参列する。

註1 禰宜(ねぎ):神職の職名の1つ。一般神社では、宮司の下位。権禰宜の上位。(宮司を補佐する者の職稱)

註2 遷座(せんざ):神仏の座をほかの場所へ移すこと

出典・参考文献:

『陸軍気象史』 陸軍気象史刊行会

杉並区公式情報サイトすぎなみ学倶楽部

上右の写真:『躍進の杉並(昭和11年)』

(再編集:TFF)

馬橋小学校の大穴落下事故 (杉並区高円寺北4-28-5)

防空壕(参照▶P20)に関する情報を集めているうちに、戦後に悲しい事件が起こったことを知った。馬橋小学校に通う児童が、防空壕と思われる穴に落下して死亡したのである。そこで当時を知る同学年の野村茂樹さん、馬場喜久雄さんに話を聞いた。

昭和31(1956)年5月2日昼頃、事故は起こった。この日の朝は大雨となり、予定されていた遠足が中止となった。お昼前に登校した2年生(当時は教室が不足したことから登校は二

部制だった)は給食を待つため校庭や運動場で遊んでいた。雨だったので傘をさしながら、運動場のすみにある登り棒があるところでT君をはじめ、7、8名の男子が、雨でできた小穴に雨水を流し込んで遊んでいた。

すると堰を切ったように雨水が小穴に流れ込み、みるみるうちに、その穴は大きくなり、遊んでいた児童たちはまるで蟻地獄に吸い込まれるように、穴に落ちてしまった。(次頁に続く)

T君の友達だった野村さんもその1人。膝上まで穴に落ちたが、這い上って脱出した。ある人は花壇のふちに手をかけて這い上った。

陥没の騒ぎを聞いて駆けつけた、若い体育の得意な永田秋男先生は、穴に入り助け出そうとした。続々と先生や近所にいた大人たちが駆けつけ、給食に使うバケツを使って、穴から土砂や水を掻き出し、消防車が駆けつけ、救助に当たったが、間に合わず、T君は帰らぬ人となった。

この穴が防空壕の跡であったのかどうかは定かではない。朝日新聞では、防空穴として紹介している。

その後、T君を偲んで学校葬が行われた。学校葬当日に転

校してきた同学年の小山さんは、「なんて学校に移ってきたんだ」と大変驚いた。

この事故は大きく扱われ、他区の教職員にも知られていた。



T君の遺影を見送る児童たち

後年、小学校教員になった馬場さんは、研修で知り合った立川第一小学校の先生からも尋ねられたという。

出典：
馬橋小学校保管アルバム
(取材：野見山肇)

それでも生き続ける杉六小のかしの木 (杉並区阿佐谷南1-24-21)

昭和20(1945)年5月24日、25日の空襲は、杉並区内に最大の被害をもたらした。杉並第六国民学校はじめ区内の国民学校



8校が全焼した。当時杉並第六国民学校2年生だった深澤養三さんに話を聞いた。

「疎開から戻ってきた12月、学校がなくなっていて、とても悲しかったです。一面が焼

け野原のようでした。学校のあった場所は棚田組という会社の製材所になっていて、おがくずが山になっていて周りにはバラック小屋が建っていました。でもかしの木が残っていたんです。半分は焼け焦げていて、半分だけが残っていましたが、きっと枯れてしまうんだと思いました」

だが、このかしの木は現在も杉並第六小学校(以下、杉六小)で生き続けている。

かしの木は杉六小の「センター」だ

深澤さんによれば、「全焼する前には学校の運動場の隅に立っていました」。今の南校舎付近は、かつて民家が建っていたが、昭和34(1959)年にそこを買い上げてプールを増設。かしの木は相対的に少し中央に近付いたことになる。

ある卒業生(50歳代)の在学中の記憶によると、かしの木のダメージは幹が大きくえぐれているくらいだったそうだ。空襲で半分焼け焦げた過去があるとはつゆ知らず、「小学生当時は木に雷が落ちたのだらうと思っていた」と話す。運動会の時には万国旗を張り巡らすロープを巻き付けるなど、現役の大木として重宝されていた。

やがて平成24(2012)年頃に始まった道路拡張工事のため、杉六小は敷地の馬橋通り側の一部を区に提供。敷地脇に立っていた倉庫などを撤去したため、倉庫跡の一部が運動場となり、かしの木はさらに運動場の中央に近付いた。過去には運動会のトラックがかしの木の外周にひかれたこともある。まさに杉六小のセンター的存在なのだ。

そのかしの木に戦後、新校舎が建ったとき、運動場のじまになるということで撤去する計画が浮上した。しかし、先生方や地域の人々から「学校が全焼するという災難を乗り越え、生き残ったかしの木を守ろう」という強い声が集まり、木は生き続けることができた。杉六小にとってかしの木はシンボルツリーだ。合唱団や給食のメニューにもかしの木の名が使われ慕われている。夏には「かしの木キャンプ」という地域ぐるみのイベントも開催。そして、卒業アルバムなどで記念撮影するときは、児童はいつもかしの木のそばに集まる。杉並区最大の空襲を乗り越え、生き延びたかしの木。今はちょっと弱ってしまい支えがないと立ってられないが、これからもずっと元気な葉っぱを付けて、みんなを見守り続けてほしい。

出典・参考文献：
杉並第六小学校保存資料
杉並区公式情報サイトすぎなみ学倶楽部
(再編集：野見山肇)

杉並の文化人と戦争

戦前より、杉並には多くの文化人が暮らしていた。

執筆禁止令、行き先の見えない毎日…。
戦時中、彼らは何を見、何を思ったのか。

酸欠の金魚のよう



写真提供：(公財)東京子ども図書館

『ノンちゃん雲に乗る』石井桃子

(中川宗弥画・福音館書店)

「いまから何十年かまえの、ある晴れた春の朝のできごとでした。いまでいえば東京都、そのころでは東京府のずっとずっと片すみにあたる菖蒲町という小さい町の、またずっとずっと町はずれにある氷川様というお社の、昼なお暗い境内を、ノンちゃんという八つになる女の子がただひとり、わあわあ泣きながら、つうつうはなをすすりながら、ひょうたん池のほうへむかって歩いておりました。」

児童文学作家、翻訳家・石井桃子の代表作のひとつ『ノンちゃん雲に乗る』。昭和14(1939)年より荻窪で暮らしていた石井が、戦争中、兵隊に行った友人の心を和ませようと書かれたもの。当時の心境を、いつ死ぬかもわからない、行き先の見えない毎日が息苦しく、酸欠の金魚

のようにあつぷあつぷしていたという石井。改めて本作を読むと、ノンちゃんの愛らしい姿の裏に「死」が見え隠れしており、著者の思いと重なるようだ。

<プロフィール>

石井桃子 いしいももこ

明治40(1907)年、埼玉県浦和市出身。昭和14(1939)年より、亡くなった友人の家を譲り受け荻窪で暮らす。昭和20(1945)年、食糧難を痛感し、宮城県に疎開。奇しくも終戦の日より栗原郡鶯沢村で友人と開墾・農業・酪農を始める。5年後、荻窪に戻り、子どもたちのために多くの作品を残した。昭和33(1958)年、自宅に「かつら文庫」を開設し、家庭文庫普及の先駆けとしても活躍。平成20(2008)年、101歳で逝去。同年、杉並区名誉区民に選ばれた。

参考文献：

『ひみつの王国 評伝石井桃子』 尾崎真理子 著

『石井桃子コレクションV エッセイ集』 石井桃子 著

『のらくろ一代記 田河水泡自叙伝』

田河水泡・高見澤潤子 (講談社)

身寄りのない野良犬が兵隊として活躍する漫画「のらくろ」。作者、田河水泡は、昭和8(1933)年より荻窪に暮らしていた。

大正8(1919)年に徴兵された自身の経験から誕生した「のらくろ」は、昭和6(1931)年、『少年倶楽部』新年号より「のらくろ二等卒」として連載がはじまる。不幸な野良犬が元気に活躍する姿は子どもたちの人気となり、一大ブームに。しかし、昭和16(1941)年、日中戦争以来の物資不足、紙不足のため執筆禁止令を受け、連載中止となる。当時の思いが本書に書かれている。

「戦争は国民を犠牲にするものです。戦争中はすべての人々が、様々な多くの犠牲を払いました。私のはのらくろ執筆も、戦争の犠牲になったのです。」

戦争が激しくなるにつれ、仕事もなくなったが、家族の前では明るく振る舞っていたという田河。本書には昭和20(1945)年、荻窪の空襲で、近隣に大きな被害を受けた様子も書かれている。その後、宇都宮、信州へと疎開した。

私ののらくろの執筆も、戦争の犠牲になったのです



<プロフィール>

田河水泡 たがわすいほう

『のらくろ先生の観葉植物』表紙より ©田河水泡・鶴書房
明治32(1899)年、東京都生まれ。本名、高見澤仲太郎。昭和3(1928)年「目玉の子ビちゃん」で漫画家デビュー。昭和6(1931)年、『少年倶楽部』で「のらくろ二等卒」連載開始。昭和16(1941)年、連載中止となるが、昭和33(1958)年、雑誌『丸』で「のらくろ自叙伝」連載開始、再び「のらくろブーム」となる。昭和8(1933)年より38年間、杉並で暮らす。平成元年(1989)、90歳で逝去。

参考文献：

『永遠のふたり夫・田河水泡と兄・小林秀雄』 高見澤潤子 著